

徐興慶教授の新著に寄せて
——東アジア文化交渉学と国際日本研究の先駆者として

今、筆者の手許には、此度、寧波出版社より上梓される運びとなった、徐興慶教授(以下徐氏と称す)の最新の御高著『跨國界的文化傳釋——朱舜水與近代中日人物的文明史觀論』の御尊稿のコピーがある。ずっしりと持ち重りのする、膨大かつ同時に周到精密、質量ともに圧倒的な内容で、総計二十万字超の文字どおり、浩瀚なる大著の公刊が待ち望まれる。また、その内容を拝察するに、本書は、徐氏の多年に亘る御研究や思索、多方面での文献調査はもとより、その成果としての既存の御著作の集大成とも言うべき偉業であって、まさに徐興慶思想史学の精華を集約した、渾身の力作であり、研究史上の好著である。甚だ僭越ながら、筆書も、長きに亘って、徐氏の御教導を忝くした後学の一人として、徐氏に対してはもとより、更には、斯界や広く江湖のためにも、本書の公刊を心から言祝ぎ、お慶びを申し上げる次第である。

さて、徐氏に関して、特に台湾の読者の皆様方に対して、今更ながら、筆者などが御紹介の言辞を重ねるまでもない仕儀ではあるが、甚だ僭越ながら、中国大陸の読者に敢えて茲に些かの蕪辞を列ねることに御諒恕を願いたい。

徐氏は、1956年に台湾南投県のお生まれで、東呉大学東方語文学系を卒業の後、日本の九州大学大学院に留学して、1992年には、文学博士(九州大学)の学位を取得された。その際の博士論文の題目は「近世中日文化交流史の研究——朱舜水を中心に」であった。徐氏の研究上の御専門は、近世から近代に至る時期の中日の学術・思想・文化の交流史・交渉史であるが、次いで、そこから発展的に派生した研究領域として、日本の近世儒学や漢文学、更には、近代東アジアの知識人におけるモダニティの問題など、きわめて多岐に亘る分野で、中日の両言語を通じて、陸続と堅実な成果を上梓され、台湾や中国、日本などの東アジアは勿論のこと、世界的にも斯界をリードし、代表する碩学・泰斗として、大いに活躍されている。

因みに、徐氏の公刊された単著だけでも、それぞれ日本語のものとして、学位論文の後継とも見做すべき『近代日中思想交流史の研究』(京都・朋友出版、2004年)、大変意欲的な問題作でもある『東アジアの覚醒——近代日中知識人の自他認識』(東京・研文出版、2014年)、台湾での刊行として、徐氏の御研究の本流を示す大著『朱舜水與東亜文化傳播的世界』(台北・臺灣大學出版中心、2008年)の三点があるほか、編著や共著・共編著に至っては、『新訂朱舜水集補遺』(東亞文明研究資料叢刊2、台北・臺灣大學出版中心、2004年)をはじめ、同じく臺灣大學出版中心の東亜文明研究叢書のシリーズからは、『徳川時代日本儒学史論集』(同・叢書15、2004年)、『東亞文化交流與經典詮釋』(同・叢書78、2008年)、『江戸時代日本漢學研究諸面向：思想文化篇』(同・叢書82、2009年)、『東亞知識人對近代性的思考』(同・叢書81、2009年)、『現代日本政治事典』

(東亞文明研究資料叢刊 6、2008 年)。次いで、同じく臺灣大學出版中心から、『朱舜水與近世日本儒學的發展』(東亞儒學研究叢書 16、2012 年)、『東亞文化交流：空間、疆界、遷移』(儒學與東亞文明研究叢書第二輯、華東師範大學出版社、2012 年)。『天間老人獨立性易全集』(上下兩冊、臺灣大學出版中心、2015 年)。日本学研究叢書から、『國際日本学研究的基層—台日相互理解の思索と実践に向けて—』(日本學研究叢書 1、臺灣大學出版中心、2013 年)、『轉換中の EU と「東アジア共同体」—台湾から世界を考える—』(同・叢書 7、臺灣大學出版中心、2012 年)、『近代東アジアのアポリア』(同・叢書 8、2014 年)、『思想史から東アジアを考える』(同・叢書 21、2016 年)、『十七世紀の東アジア文化交流—黄檗宗を中心に』(同・叢書 30、2018 年)。更には、文献学的・史料的な価値の極めて高い集成として、『季刊日本思想史』81(特集：朱舜水と東アジア文明—水戸徳川家の学問、ぺりかん社、2014 年)、『日本徳川博物館藏品録Ⅰ 朱舜水文獻解釋』(上海古籍出版社、2013 年)、『日本徳川博物館藏品録Ⅱ 徳川光圀文獻解釋』(同、2014 年)及び『日本徳川博物館藏品録Ⅲ 水戸藩内外關係文獻解釋』(同、2015 年) などなど、十指に余るものが存しており、最早、枚挙に暇が無いほどである。

また、徐氏の研究・教育上の経歴としては、東呉大学、中国文化大学、日本の天理大学などで教鞭を執られたほか、日本の関西大学、京都大学人文科学研究所、早稲田大学、九州大学、名古屋大学、国際日本文化研究センター、中国の清華大学、東北師範大学などでも、研究や教育上の御滞在歴がおりである。次いで、長らく国立台湾大学日本語文学系教授・同主任や日本語文学研究所長、日本研究センター主任の重職を経て、更に 2018 年より、つい先頃まで、中国文化大学学長の重任を担われるなど、教学面や大学行政の第一線でも、八面六臂の活躍をされたことは、周知のところである。現在も、引き続き、中国文化大学教授、同・国際及び外国語文学部学部長、並びに、東アジア人文社会科学研究院院長の重責の任にある。

その一方で、研究や学術的な国際交流などの方面では、台湾大学時代から、日本語文学研究所や人文社会高等研究院などにおいて、夙に多くのプロジェクトを主宰し、領導されて来られたことも、最早、贅言するまでもない。因みに、そうした東奔西走とも言うべき多忙を極める日々の中で、2012 年には、二つ目の学位として、同・申請論文「近代日中知識人における自他認識の研究」によって、関西大学より、文化交渉学の論文博士の学位を取得されたことも、まさに瞠目に値する。

徐氏の国際的な学術交流上の業績や貢献の中でも、取り分け、特筆すべきものとしては、2015 年より発足した、東アジア日本研究者協議会の発起人として、朴喆熙・ソウル大学校国際大学院院長、徐一平・北京外国語大学北京日本学研究センター長、李康民・漢陽大学校日本学国際比較研究所長、小松和彦・国際日本文化研究センター長の各氏(職名は当時)とともに、五名の発起人の一人に名を列ねて、その設立や運営に多大な尽力をされたことである。東アジア日本研究者協議会の創設の背景としては、東アジア各国には、極めて多くの日本研究者が存在するにも拘わらず、個人や大学間などの交流や連

携は、多々行われているものの、欧州を中心とするE A J S（欧州日本学会）や北米のアジア学会（A A S）のような、日本研究者が一堂に会して集い、交流し合う場が、存在しなかった点が挙げられる。それ故にこそ、単に学術上の国際交流のみならず、東アジア地域における民間の草の根の交流の促進や相互理解の涵養にも繋がるものとして、東アジア日本研究者協議会の今後の活動が大いに期待される。

その他、徐氏には、筆者の勤務先である国際日本文化研究センター（日文研）が主導して、内外の大学や研究機関と連携して活動している「国際日本研究コンソーシアム」の外部評価委員としても、平素より、多大な御示教や御高配に与っているところでもある。

徐氏におかれては、如上の実績や活動が評価されて、2021年には、日台の学術・文化の交流に尽力した貢献や功績により、日本の外務大臣表彰の榮譽を受けられた。その他にも、母校である台湾・東呉大学から、「東呉大学端木愷学長講座教授」（英訳：Joseph K. TWANMOH Chair Professor）として顕彰されたことも、記憶に新しいところである。

さて、此度の御高著の御尊稿を繙きながら、また、徐氏の如上の御研究や御活動、社会的な実践の背景として、飽くまでも、卑見ではあるが、いわば大きな柱や一種の通奏低音となっているものに、深く思いを致さざるを得ない。

それはまず、第一には、思想史研究や中日の文化交流史の研究、人物研究の対象として、その初発の段階からの素材でもあり、その後の御研究の中心や核心を成す、朱舜水という人物に対する着眼とその御研究である。次いで、まずは、御研究の趣旨や方法論としての、また、同時に、そのバックボーンを成す、ある種の哲学や思想とさえ評しても良い姿勢としての、一方での文化交渉学や東アジア文化交渉学、他方での国際日本研究、ないしは、国際日本学という、鮮明なお立場である。

今般の御尊著でも、朱舜水をいわば舞台廻しやキー・パーソンとしつつ、ほぼ同時期に、中国から日本に渡来した人々、隠元禅師や独立禅師、陳元賛ら、また、その周辺人物としての鄭成功、朱舜水と交流のあった水戸藩や加賀藩の人々、朱舜水の思想との比較・対照としての熊沢蕃山や山鹿素行、そして、『大日本史』や水戸学の形成に列なる人々の系譜、といった具合に、恰も中日の交流史の直中に、朱舜水という人物が出現し、着地したその瞬間から、いわば一つの漣が徐々に大きな波紋を呼び起こすかの如く、思想史や文化交流史・交渉史上の化学反応が起こり、異文化間での文化接触や文化の伝播・受容から、落地生根とも言うべき、文化複合へと繋がって行く道筋が、細心の注意や詳細な検証とともに、全体として、大掴みにも再提示されていることに、今更ながら、思い至る。そして、この朱舜水こそは、徐氏の最初の博士論文の素材や対象でもあり、飽くまでも、研究上の対象とは申せ、一面ではそれを超えて、徐氏にとって、一方ならぬ愛着や敬意の対象でもあるように拝察される。

文化交渉学や東アジア文化交渉史、東アジア文化交渉学といった呼称や概念が、現代の台湾のアカデミアにおいて、どの程度、認知されたり、通用しているか否かに関して

は、筆者は不勉強で、寡聞にして、存じ上げないが、筆者の知る限りでは、例えば、日本においても、比較的近年になって、徐々に用いられたり、認知され、共有されてきた呼称であり、学問的な概念でもあるように受け止めている。取り分け、関西大学が申請した文化交渉学教育研究拠点 (ICIS) 計画が、2007年に、文部科学省の「Global COE」プログラムに採択されたことを発端として、関西大学の関係者らを中心として、「文化交渉学」の構築やそれを担う学会や研究組織の創設が目指された結果、2009年には、東アジア文化交渉学会 (Society for Cultural Interaction in East Asia) が発足し、その後、同大学に文化交渉学研究拠点や大学院の東アジア文化研究科・文化交渉学専攻が、それぞれ新設された。

少なくとも、日本においては、文化交渉学や東アジア文化交渉史といった呼称や学問上の概念は、これら関西大学や東アジア文化交渉学会の関係者によって、深められ、練り上げられた側面が大きい。因みに、旧来は、文化交流史という呼称が、むしろ一般的であったのに対して、おそらく異文化相互の接触や交流、伝播のみならず、それを媒介とした、相互的な影響や相互干渉、相互滲透や文化複合などの観点をより重視する意味合いで、文化交渉学や東アジア文化交渉史といった呼称や概念枠組みが選ばれたものと考えられる。

徐氏の二つ目の学位は、まさにこの文化交渉学 (関西大学) によるものであり、また、甚だ僭越ながら、徐氏らの驥尾に付す恰好で、筆者自身も、前述の東アジア文化交渉学会の発起人にも名前を連ねさせて頂いている。しかるに、朱舜水研究を中心とする、徐氏の学問上の履歴は、こうした呼称や学問的な概念が成立する遙か以前から、まさに文化交渉学や東アジア文化交渉史という学問の遂行を実質上、身を以て実践しておられたと評しても、過言ではあるまい。

次いで、国際日本学や国際日本研究という理念や呼称もまた、比較的近年になって、徐々に一般化しつつあることは、最早、贅言するまでもないところである。これは、日本研究を狭い一国史観的な枠組から解放させ、それを脱却して、広く東アジアの地域や歴史的な文脈の中に位置づけ直した上で、東アジアや欧米を含む、よりグローバルな視点の中で、人や文化の移動や交流、越境、比較などの観点から、再検討しようと試みるものである。また、ステロタイプ的な日本文化論を排して、日本それ自体をも、一面では相対化し、他者の眼を以て、客観視するという立場でもある。重ねて甚だ僭越ながら、筆者の勤務先である国際日本文化研究センター (日文研) では、前述したように、徐氏の御示教やお力添えも仰ぎながら、まさにこの国際日本研究という理念や立場を鮮明に掲げて、国内外の大学や研究機関と連携しつつ、いわばそのお世話役として、「国際日本研究コンソーシアム」という活動を展開している。

徐氏もまた、関西大学や国際日本文化研究センター (日文研) においても、現代の社会や学界における、また、日本や台湾にとっての国際日本学や国際日本研究の意義について、度々貴重な問題提起や講演を行って戴いている。そして、この国際日本学や国際

日本研究という学問分野に関しても、それが提起され、高唱されて、社会的にも認知される遙か以前から、意識的・無意識的にも、徐氏の学問上のお立場や姿勢であったことに、やはり今更ながら、得心せざるを得ないのである。

そして、こうした徐氏の学問上の理念や姿勢を導いたものは、無論、すぐれて教授御自身の炯眼であり、深い叡智でもあることは、論を俟たないが、その一つの契機となったのが、お若い頃からの研究上の対象であり、素材でもある朱舜水の学問上の履歴や個人的な来歴、有為転変でもあったと申し上げても、強ち的外れではないであろう。ある意味では、朱舜水その人こそが、文化交渉学や東アジア文化交渉史を身を以て体現もし、国際日本学や国際日本研究の恰好の素材や対象となり得る経歴を履んだ人物でもあった。徐氏の八面六臂の学問上の活動や社会的な実践もまた、恰も現代世界における朱舜水の如く、狭い国境や文化圏を超え出て、東アジアから、更に世界へと大きな波紋を拡げつつ、多大な影響を及ぼして行くであろうことは、最早、間違いの無いところであると確信している。

右、甚だ僭越ながら、敢えて贅言を呈した所以である。謹んで御尊著の公刊を言祝ぎ、お慶びを申し上げますとともに、徐氏の向後、益々の御健勝、並びに、御活躍と御発展、御清硯と御文安を衷心より祈念申し上げます。

国際日本文化研究センター（日文研）教授
総合研究大学院大学（総研大）文化科学研究科長・教授
中国社会文化学会・理事長

伊東 貴之 記

2022年・壬寅 5月吉日